

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	明治末期における黄禍論批判 : 「反人種主義」の逆説
Author(s)	李, 凱航
Citation	史学研究 , 301 : 27 - 54
Issue Date	2018-10-12
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055643
Right	
Relation	



明治末期における黄禍論批判

—「反人種主義」の逆説—

李 凱 航

序論

本稿は、三国干渉後、盛んになりつつあった黄禍論を、当該期日本に置かれた時代状況に即して考察するものである。従来の研究では、黄禍論を三国干渉、義和団事件、日英同盟などの刺激的な外交事件と繋げて検討した上で、明治知識人の黄禍論批判を「反人種主義」の思想的意義として捉えてきた。しかし本稿は、その黄禍論批判を明治期における人種論の受容状況において考察し、黄禍論批判のなかに「人種差別主義」が既に含まれていたことを明らかにする。

まず、本稿は黄禍論の概念を絞って議論しながら、黄禍論の研究史を概観する一方、場所と時間による黄禍論そのものの複雑性と多義性をも示す。そして黄禍論を明治期における人種論の受容史に置いて検討し、日本人が黄禍論批判を借用

して東アジア秩序を再構築しようとしたことを論じる。最後に、黄禍論批判を「文明開化」、「日本人アリア人種起源説」、「大アジア主義」に分けた上で、ケース・スタディーズという形で森鷗外（一八六二〜一九二二年）、田口卯吉（一八五五〜一九〇五年）、高山樗牛（一八七一〜一九〇二年）という明治知識人の黄禍論批判と人種差別主義との並行関係を解明していく。

第一章 黄禍論について

第一節 概念と定義

「黄禍論」とは何かについては、いろいろな定義がある。例えば、平凡社の『大百科事典』によると、「(黄禍論とは)黄色人種がやがて世界に災禍をもたらすであろう、という

ヨーロッパで起こった説で、(中略)もつとも早いのはドイツ皇帝ウィルヘルム二世で、彼が画家クナックフスにいわゆる『黄禍の図』を描かせ、それをロシア皇帝ニコライ二世に送ってから、黄禍論はヨーロッパにおいて問題となった。それとともに日本と中国においても、三国干渉の結果として逆に『白禍』が叫ばれるようになった^①と指摘されている。

また、『新版・日本外交史辞典』によると、「日清戦争も終局に近づいた一八九五年の初め、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が、同戦争における日本の勝利に警戒心を抱いて唱えだしたことに代表される黄色(東洋)人種抑圧論^②」であると指摘されている。

以上、見てきたように、日本における百科事典に収録された項目、いわば一般的な理解としての「黄禍論」は、三国干渉以後の外交の事態を強調し、西洋の帝国主義が東アジア進出のために打ち出した外交策として捉えてきた。しかし、このような理解は一面的であり、国際政治的な要因を重視するあまり、西洋社会における長い人種差別主義の思想的背景を見落とすおそれがある。

したがって、一般的に読まれている百科辞書の記述と異なり、日本における黄禍論問題の先駆的研究者である橋川文三(一九二一―一九八三年)は、黄禍論を西洋における人種差別主義の枠組で扱われるべきだと主張する。橋川によれば、黄禍論は「白色人種の黄色人種に対する恐怖、嫌悪、不信、蔑視の感情を表現したもので」、「人種の偏見、人種の差別と

いうカテゴリーに属する現象」であり、「その意味ではアメリカにおける黒人問題、ナチスにおけるユダヤ人問題、南ア連邦におけるアパルトヘイト問題などと同種の現象にほかならない^③」という。そのうえで、橋川は黄禍論の特殊性を次にように述べている。

「黄禍の場合には、おそらくその背景にある歴史と、黄色人口が地球人口の中に占める比率の圧倒的な高さのために、同じ人種差別の観念の中でも、とくにきわだった形姿をとっているということができるかもしれない。つまり、人類社会に伝承、形成されてきたさまざまな人間差別の心理的複合体のうち、もつともながい歴史をかけて作り出された膨大な『神話』が黄禍論である。」^④

言い換えれば、橋川は黄禍論の歴史がただ三国干渉以後から始まった物語だけではないとし、「西欧の黄禍論を説くものたちはその起源を十三世紀(モンゴルの侵入)はおろか、紀元前四―五世紀(フン族の侵攻)の歴史的体験にさかのぼらせるのが通常である^⑤」という。さらに「極端な場合には、それを紀元前十世紀以前に求めるものさえある^⑥」と、橋川はより早い歴史的起源に求めなければならないと考えている。橋川によれば、「アジアとヨーロッパとの対立、抗争のすべての歴史を黄色・白色両人種のそれと同一視」したことで、黄禍論の形成は「すべて東方からする西方への圧迫を以て、

黄色人種の白色人種への攻撃とみなす心理的なイメージ⁽⁷⁾と緊密な関係があると主張する。かかる視点によれば、橋川は黄禍論の史的形成を八つの予備の段階にわけた。つまり、(一) フェニキア人の西侵、(二) ペルシアとギリシアの戦い、(三) ポエニ戦争、(四) フン族のヨーロッパ侵入、(五) サラセンのヨーロッパ侵攻、(六) トルコの脅威、(七) 蒙古の大侵攻、(八) オスマントルコの脅威である。よって、「ヨーロッパは、有史前から幾度となくアジア人種の侵略に悩まされながら、かろうじてそのキリスト教と文明とを防衛し」、「近代に入ってから黄禍論はそうした歴史的回想の上にきずかれた幻影といふべきものにほかならない」と、橋川は考えたのである。

橋川の黄禍論の形成における東・西対抗の歴史的な記憶を強調するという考えに異論はないが、しかしその論述においての黄禍論と人種差別主義との関係について、より周到な吟味が求められる。その点については、ヴィルヘルム大学の近代政治社会史教授であるハインツ・ゴルヴィツァー (Heinz Gollwitzer, 一九一七—一九九九年) は精密な論述を残した。東・西対抗という史的図式のなかに黄禍論を把握した橋川と異なり、ゴルヴィツァーは黄禍論が近代帝国主義の特有物であると主張する。ゴルヴィツァーは、一九世紀から二〇世紀にかけて黄禍論にかかわる英・米・露・仏・獨という複数的の言語による文献を蒐集し分析し、苦勞の作業を行った。彼によれば、黄禍論とは一八七〇年代から第一次世界大戦まで

一区切りとする帝国主義時代に誕生し、発展した政治的スローガンである。この時期に、経済学、地政学、人種学、人口論、統計学などの進歩により、帝国主義イデオロギーが形成されたが、これらすべてが黄禍論誕生の土壌となった。たとえば、「帝国主義の元祖の一人」とされていたイギリスの経済学者であるマルサス (Thomas Robert Malthus, 一七六六—一八三四年) は、「人間は等比数列的に増える傾向にあるが、食糧は等差数列的にしか増産できない」と考え、「飢えにかりたてられた人々が食糧を求めて押し寄せ、最後にはなにもかもが食いつくされてしまう」のだと主張する。ゴルヴィツァーによれば、「このような予言的マルサス主義であったからこそ、アジア民族からの圧迫というお題目とびつたり息があつてしまった」という。ここでゴルヴィツァーは、黄禍論と帝国主義との不可分の関係を強調している。

ゴルヴィツァーは黄禍論を批判的に検討し、「帝国主義の政治的スローガン」と断罪したものの、イギリスの歴史家であるビクター・キアナン (Victor Kiernan, 一九一三—二〇〇九年) は、黄禍論に対して、ある程度の同情的な見方を示した。キアナンによれば、「(ヨーロッパでの)普通の人々の頭には、黄禍というのは茫漠たる脅威であるといえよう。すでに中国で生活をしている膨大な人口数、加えて数百万人以上の世界に進出していた移民たちを考へるたびに、ヨーロッパ人は物怖じを禁じ得ない」。ヨーロッパ人にとって、アジアの人口は氾濫して災害をもたららし、「ヨーロッパ人は技術

的に優位に立つことでアジアと対抗しなければならぬ」。もともと中央アジアに往来していた野蛮人を指す「ホルド」(Horda)という言葉をも、現在にはヨーロッパ人はアジア人を貶すために用いている。そのため、ヨーロッパ人に対して、黄禍というの、経済的でも軍事的でもなく、膨大な人口数の外族人がもたらす脅威による「心理的な恐慌」であるとキアナンは解する。¹⁷⁾

ここでキアナンが強調しているのは、「ヨーロッパ人の歴史は小さな自由都市と国民国家に源を發し、もともと膨大な人口に対する本能的な脅威を持っていたということである」。「ヨーロッパ人にとって、アジアのもっとも代表的なものはその膨大な人口である」¹⁸⁾。一九世紀以後、ヨーロッパ人は非ヨーロッパ地域における覇権地位を確立し、「世界の主宰」という自己認識をもって世界に進出したときにも、アジアの膨大な人口は相変わらずヨーロッパ人に警戒心を持たせた。かかる意見は、ヨーロッパ人自身の歴史的發展経験に立脚し、黄禍論の形成における合理的要因を見いだそうとするものである。しかし、ここで問題となるのは、黄禍論の形成については、ヨーロッパ人自身の歴史経験の独特性は黄禍論に内包されている侵略主義・人種差別主義・帝国主義などの口実とはならないことである。かえって「ヨーロッパ中心主義」の落とし穴に陥るおそれがある。それと反対に、サイドは「黄禍」を西洋思想史に貫かれていたオリエンタリズム(Orientalism)という思考様式の枠組に置かせて批判を加え

た。周知の如き、サイドはオリエンタリズムを、西洋と東洋という存在論的・認識論的区別にもとづく思考様式と定義した上で、東洋なるものが、西洋に属するとされる側の文化的覇権主義により、一方的に表象された歴史的産物であると指摘した。すなわち、東洋は進歩的、合理的、民主主義的な西洋に対し、停滞的、非合理的、専制主義的といった属性を帯び、西洋の支配下に置かれるべき存在として表象されてきた。サイドによれば、この図式化されたイメージは、すでに古代ギリシアのオリエント記述からうかがわれるが、文学のような一つの制度化・組織化された規律となるのは、ナポレオン(Napoléon Bonaparte; 一七六九―一八二一年)のエジプト遠征により現地調査が開始された一八世紀末頃から、西洋帝国主義の東洋支配を正当化するイデオロギーとして機能したという。こうした東洋と西洋を分かち心象地理が、美術や文学など、あらゆる人文科学的テキストに分配され、言説として強力的に作用した。その結果、言説が現在性を獲得し、あたかもそれが事実であるかのようにみなされるにいたったのである。²⁰⁾ サイドによると、このようなオリエンタリズムを支えた西洋人のドグマは四つに分けられたという。

「第一は、合理的ですすんだ、人道的にしてすぐれた西洋と、常軌を逸し、遅れ、劣った東洋とのあいだに絶対的・体系的な相違がある、とするドグマである。第二番目は、オリエントに関する抽象概念、とくに『古典的』

オリエント文明を表象する諸文献にもとづいた抽象概念が、現代オリエントの諸現実から直接引き出される証拠などより常により望ましいものであるとするドグマである。第三は、オリエントが永遠にして画一的であり、自己を定義することができないというもの。したがって、西洋の視点からオリエントを叙述するためには、高度に一般的・体系的な語彙が不可欠であり、学問的に『客観的』でさえあるという主張がなされることになる。第四のドグマは、オリエントが本質的に怖るべきもの（黄禍、モンゴル遊牧民、褐色人種の統治）であるか、統御されるべきもの（講和、調査、開発、可能ならば完全占領によって）であるとする考え方である。²³⁾

ここでサイドは、西洋人がオリエンタリズムという思考様式的作用下で、オリエントは先天的に「怖るべき」ものと断じたうえで、「黄禍」というイメージは生まれたのであると考えた。西洋に対するサイドの植民地主義・文化覇権主義の批判はほかの学者の共鳴に受けられた。たとえば、周寧は、黄禍という東洋に対する文化的イメージが、一八世紀から一九世紀にかけてヨーロッパの中国像のシフトという史的文脈に置いて検討しなければならぬと指摘する。周寧によれば、啓蒙主義以来、西洋社会は「東方—西方、野蛮—文明、有色人種—白色人種」という対立の図式はだんだん確立しつつあり、この間中国は文明・進歩的なヨーロッパと対照的な

関係として理解されてきた。²²⁾ そのあとに、「極端な種族主義思想はさらに『野蛮的』な中国人像を『黄禍論』に発展させていた。黄禍論という思想の形成は政治・経済・軍事的な原因、そして歴史・文化・心理的な原因も含まれ、さまざま要因とかわりながら、なかでも最も主要なのは種族主義思想である。」²³⁾「種族主義の文化心理に即して言えば、黄禍とは西洋種族主義者の自虐的な文化想像にすぎないものである」²⁴⁾と周は結論づけた。

周の研究は、ヨーロッパにおける中国像の史的転換を手がかりに、黄禍論が帝国主義・種族主義の土壌から生まれて、中国に対する侵略を正当化するイデオロギーとして機能していたことを明らかにした。しかしその一方では、楊瑞松は黄禍論の形成と展開は西洋人その片面的「貢献」ではなく、中国人自身の黄禍論に対する受容状況にも深くかわると指摘する。楊は清末民初の中国における黄禍論と関係する文献を調べて、中国人は西洋人に悪意的に「黄禍」と言われても平気で受け入れ、さらに「黄禍」になろうという「黄禍英雄像」が誕生していたと考える。楊の分析によると、それは当該期における中国の内・外的政治危機と関係するのである。社会進化論の流行、黄白人種戦争という図式の圧力、加えてそもそも黄色は伝統中国には高尚・名譽、そして皇帝と直接的に関係する積極的意味を含んでいることを背景に、西洋人が中国を「黄禍」を見なすのは、中国人自身の能力を強調することとして理解されてきた。²⁵⁾ 清末の革命家である鄒容（一八八五

（一九〇五年）の言葉「尔有黄禍之先兆、尔有種族之勢力」（『革命軍』、一九〇三年）に象徴されるように、中国人自身は黄禍をみずから名乗って、西洋人と対抗しようとする姿を示した。²⁷楊は、黄禍の形成と発展は、単に西洋人のオリエンタリズムのみならず、中国人自身のセルフ・オリエンタリズム（self-Orientalism）²⁸ともかわると主張する。

前述したように、中国学者たちが黄禍論における帝国主義と人種主義の是非・功罪に執着したことが異なり、日本人学者である飯倉章は黄禍論における帝国主義と人種主義に収斂できない部分、つまり黄色人種として唯一列強の隊伍に加入した日本の特殊性に着目してきた。「人種主義と黄禍思想との関係は、実際のところはそれほど単純ではない」と飯倉は指摘し、「人種主義に依拠する見方は、『黄禍』論者に深刻なジレンマを突きつけることにもなった。というのは、『黄禍』と目された日本人と中国人が本当に劣等人種にすぎないのであれば、文明の恩恵に浴することもなく、従って本来は脅威にもなりえない。脅威となるには、少なくともある程度はその能力を評価することが必要だからだ。しかし、そうなる和人種によって能力の差異があるという前提に影響が出てくる。また、序列が下とされた黄色人種のなかから日本だけが発展して帝国主義列強となったことは、黄色人種をひとまとめにして論じていては説明できない。そう考ええると日本の登場は、まさに人種のエエラルキーを突き崩すような『事件』であった」という。²⁹よって、飯倉は「日本例外主義」を唱え

ていた。

飯倉によれば、「人種的に非白人である日本の勃興は、白人に支配された地域の人々の希望となったのは事実であり、そこに日本だけが、この白人対非白人の人種対立が半ばは事実として進行していた時代にあつて、非白人の側の特別な使命を担っているという信念（あるいは思い込み）を可能にした。『帝国主義が世界を覆い尽くすような拡大をした時期に、そのような日本例外主義が人種的な相違を主因として芽生えたこと、そして、『黄禍』という言葉やイメージはこの日本を例外とする考えを増幅し、その意味でまさに日本例外主義の源流と言える。』³⁰つまり、西洋人が日本を黄禍とすればするほど、日本例外主義の傍証になる。飯倉は、黄禍論と日本例外主義は相互的な前提として捉えてきたのである。

黄禍論における中国と日本との関係を相対化し、人種差別主義に置かれた日本の特殊性、そしてそれを「例外主義」として捉えたことについては、飯倉の研究から大きな示唆を受けられるが、「表舞台に現れた日本例外主義は、やがてアジア主義へと変貌を遂げ、後には、日本人を指導民族としてアジアを白人の支配から解放するという思想にまで至り、悲惨な結果を生み破綻した」という飯倉の結論には、本研究は賛成しかねる。なぜかという点、黄禍論を検討する際に、日本を西洋人種主義の「例外」としての飯倉の捉え方は、黄・白人種対立という図式から見れば有効になるが、東アジア秩序の再構築に置かれると、日本人が主導的に人種差別という

まなざしを同じ黄色人種である周辺国家に向けることは安易に見過ごされてしまうのだからだ。この視点が失われれば、三国干渉直後、急に盛り上がった黄禍論に対抗した日本は、まるでその後が大アジア主義を借用し、侵略主義に走ってしまつたように考えられる。しかし、本研究が明らかにしたいのは、三国干渉時期における黄禍論に対抗する言論には、日本自体はすでに西洋の人種差別主義思想に浸透れてきたという点である。また、高山樗牛のような大アジア主義者だけではなく、たとえば当該期における黄禍論について活躍していた「脱亜論」の系譜に置かれた「日本人種アーリア起源説」を唱えた田口卯吉、また日露戦争期において積極的に西洋の人種・黄禍論を反対した文学者である森鷗外も、すでに人種差別主義の思想に深く浸透されてきた。

以下、その点をめぐる先行研究を辿りながら、問題の所在と本研究の主旨を明らかにしていく。

第二節 先行研究と問題の所在

広い意味での黄禍論が長い時間に渡っているものであるが、本研究は、特に三国干渉から日露戦争までのほぼ一〇年間という時間帯に焦点をあてて、当該期の西洋社会において盛んになりつつあった黄禍論に対して、日本人がどのように対応したのかを考察する。前述したように、そもそも当該期の黄禍論は、人種差別のイデオロギーとして使われ、ドイツ帝国の皇帝ウィルヘルム二世が三国干渉の機に乗じて、日本

帝国の膨張を抑制し、東アジア、とりわけ中国への進出のために打ち出された政治的なスローガンとされてきた。かかる状況で、従来三国干渉後の黄禍論をめぐる先行研究は、国民国家形成期に日本がいかに外圧を受けながら独立国家として維持されたかという問題に着目し、日本知識人の黄禍論への対応を——濃淡の差はあれ——「反人種主義」という思想史的意義として捉えてきた。

たとえば、橋川文三は、当該期に黄禍論に対して積極的に発言していた森鷗外、田口卯吉、高山樗牛などの人物を取り上げ、彼らの言説を分析し、「オリジナルな研究の立場」、「上昇期ブルジョアジーの開明的傾向」、「なんらかの意味で偏狭的な民族優越感を持つものではない」もの、「冷然人種哲学の空想性と粗雑さを批判した」ものといったポジティブな評価を与えた。

また、山室信一は田口卯吉の黄禍論の対抗策として打ち出された「日本人アーリア人種起源説」について、その「推論や結論には著しい飛躍があるとしても、それまで『アジア人種』、黄色人種というカテゴリーでなんの疑問もなしに括られてきた日本人を世界の多くの民族と比較対照して位置づけ直すという作業に着手したことによって、アジアを人種と相即的にみて境域化する通念を批判の俎上にのせたことは否定できない」と評する。つまり、田口が西洋人種分類論の規範を突破したという点に、山室は肯定的な評価を与えた。そして、日露戦争の直前に、『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』

の二つの講演によって西洋人に人種・黄禍論を厳しく批判した森鷗外について、山室も同様に、「ヨーロッパの人種論や黄禍論をひとまずその論理に沿って紹介し、冷徹な批判」を行い、「皮肉」と「憤懣」を交えた反論をしたと、「反人種主義」の鷗外像として理解してきた。

しかしながら、三国干渉後の黄禍論への対応に関しては、「反人種主義」の思想と矛盾する混乱が生じていた。例えば、今まで黄禍論研究の到達点ともいえる飯倉章の研究は、鷗外の講演について、「白人にたいする対抗意識とともに、同じ黄色人種にたいする『優越意識』が見える」としたうえで、「鷗外は確かに白人の『黄禍』論にたいして怒っていたが、同時に日本人が中国人などの他の黄色人種と同等に扱われたことにたいしても、ひどく怒っていた」と、西洋人の日本人に対する差別意識を、鷗外はそのままに中国に転嫁させたという指摘がある。しかも飯倉は当時の読売新聞主筆である高田早苗（一八六〇〜一九三八年）を取り上げ、黄禍論という圧力下で、日本が帝国主義を採用する緊迫性を説明していた。飯倉によれば、「帝国主義の文明化の論理とその欺瞞性」を自覚したが、高田は「帝国主義の善悪の問題」を別にして、「帝国主義が今日世界多数人士の賛成」を受け、日本が「現実主義的」な路線に歩むべきだと訴えたという。

また、黄禍論が高揚していく気運に乗せて、西洋人に対抗するため、黄色人種の団結を強調する大アジア主義も一時盛んになった。しかもアジア主義は当時日本の外交策の一つの

選択肢として考えられていたように見える。しかし、こうした黄禍論と連動していた大アジア主義は、「アジアを指導教化し、ついには侵略をも顧みずその目的に向かって突進」してきたと、日本の「黄禍論」への反抗が侵略的な性格を帯びる「大アジア主義」に拍車をかける役割を果たしたと中村尚美は指摘する。

以上から見てきたように、当該期に黄禍論をめぐる言説は極めて多岐にわたっており、決して「人種主義」と「反人種主義」という対立的な二元論で語れるほど単純な問題ではない。実際には、日清・日露両役の勝利、加えて義和団鎮圧による八ヶ国同盟への加入および日英同盟の成立、さらに北海道の開拓、琉球・台湾植民地の領有などのインパクト的な一連の事件を通して、日本は「国民国家」から「帝国主義」へと転向するという運動的な軌道が見られる。かかる視座によると、「人種主義」という概念は明治日本に対内・対外の二重の役割を果たしていた。

一方では、国民国家の成立の要求に応じて、日本国内では人類学者の人種測定の作業が始まるとともに、様々な日本人種起源の仮説が賑やかになりつつあった。この時期にこそ、いわゆる「日本人種論」が成立していた。すでに指摘された通り、当該期の「日本人種論」（帝国大学の人類学に表象されるもの）は教育、医療・衛生、治安にかかわる諸「知」とともに、「日本人」という国民を作り上げるテクノロジートしての一翼を担った。このような暴力的な性格を帯びる帝国

の「知」学としての人種論は、西洋人への人種的劣等意識が自国のアイヌをはじめとする少数民族への優越意識を増幅させていた一方、その自国少数民族の「未開」性を「日本人種」全体の中に指示していくおそれも存在する。この矛盾を解決するため、「日本人種」自体の中に測定された「未開」性は、「未開」性の改善という実践へと移行していた。高橋義雄（一八六一～一九三七年）が執筆し、福沢諭吉（一八三五～一九〇一年）の序文が添えられた『日本人種改良論』（一八八四年）は、かかる知的コンテキストに生まれていたのである。

他方では、国際舞台上で、優勝劣敗・弱肉強食の社会進化論を背景に、国力の強弱を人種の優劣として解釈されていた。それとともに、帝国主義が世界を支配する正当性のイデオロギーとして機能していた「白人優越論」は、非白人種は無知蒙昧でという天賦の資源を開発する能力がないので文明人が代わってこれを開発するとか、劣等人種は優等人種の支配を受ける運命にあり、たとえ暴力を用いても劣等人種を文明に導かなければならないと唱えている。中国の遼東半島をめぐる日本とドイツの競争のなかで、ドイツ人が「黄禍論」を打ち出したのは、こうした「白人優越論」のまなざしがあったのである。実際には、「白人種優越論」と「黄禍論」は、西洋人の自他認識として、人種差別主義の表裏一体のものともいえる。だから、明治末期における黄禍論の研究に入る前に、日本の人種差別主義の受容の経緯を整理しておかないと、黄禍論への対抗の実態を解明することができない。

前述したように、黄禍論をめぐる言説に提示される「反人種主義」の性格に対して、ある程度の懐疑的態度が現れていたが、具体的な分析は乏しい。また、そのような言説は先行研究においてほぼ例外として扱われて、「反人種主義」のありべき姿が前提とされるように思われる。実際に、こうした矛盾は日本の人種論の受容の状況に根ざしている。すでに指摘される通り、人種概念の使用が日本人の対外的認識だけではなく、日本人の自己認識とも深く関わっている。白人種が文明、黄色人種が野蛮といった、生物学的な人種区分と文明開化の度合いとが相関する人種優劣説の浸透によって、日本人の白色人種への劣等感と他の黄色人種に対する優越感が現れた。また、アジア情勢についても、白人種との対抗関係以上に朝鮮をめぐる日清間の対立が切実な課題となり、清国人に対する同人種ゆえの脅威と恐怖の念が蔑視と差別感情に転化した。そもそも黄禍論に対抗する大アジア主義が、日本の侵略主義に加担するイデオロギーに墜ってしまったのは、このような状況のなかで確認しなければならぬ。

本研究では、上記の論点を踏まえつつ、「反人種主義」より、明治期における「黄禍論」批判に隠された「人種主義」に共謀する思想を掘り出そうとする。また、従来先行研究において三国干渉や義和団事件や日英同盟などの刺激的な外交事件に焦点をあて、黄禍論に対する抗争の物語として論じられてきたことと異なり、本稿は当該期に「黄禍論」に関する活躍していた森鷗外、田口卯吉、高山樗牛三人を考察対象とし、

それぞれをケース・スタディーという形で展開させ、彼らの人種論言説に隠された人種主義を究明する。視点としては、三国干渉後、一時的な感情的な把握を乗り越え、彼らの黄禍論に対する認識を各自の生涯的なスパンに渡る人種論のコンテキストのなかに置いて検討する。かかる作業を通して、三国干渉後、新興帝国日本の膨張に抑制を目指す黄禍論に提示される研究対象の自他認識について、共鳴であれ対立であれ、「人種主義」の根底を共有していることを明らかにする。また、従来明治末期における黄禍論をめぐる諸言説について、ヨーロッパと東アジアとの対立を重点に置かれた議論と異なり、本稿は日本人が黄禍論を借用して、東アジア秩序の再構築を行うにしようとする点を強調する。その上で、黄禍論の言説空間に、白人種対黄色人種という図式だけではなく、黄色人種間の対立としても示されたという点も論じる。

第二章 黄禍論と明治知識人の対応

第一節 森鷗外の場合——衛生学から見た人種差別主義——

一九〇三年、森鷗外は二度、人種問題に関わる講演を行った。⁽³⁰⁾『人種哲学梗概』⁽³¹⁾と『黄禍論梗概』⁽³²⁾である。それによって、当時盛んになりつつある人種・黄禍論に対して、鷗外自身の関心が示されたとともに、人種論がすでに「時代趨勢の喫緊的問題」⁽³³⁾になったことも窺える。『黄禍論梗概』において、

鷗外はまず西洋人の「義理」に対して疑問を呈した。

青眼もて白人を視、白眼もて黄人を視る。乃ち新語を造り出して黄禍と云ふ。安ぞ知らん、北のかた愛理に五千の清人を駆りて、黒龍江水に赴きて死せしめ、南のかた旅大を蚕食して、陽に租借と称するは、人道に逆ひ、国際法を破ること、殆ど人の意料の外に出づるを。

鷗外は「人道」「国際法」など西洋の論理を逆手にとって、ロシア人の清国人に対する残酷行為を批判し、白人であるロシア人が道徳的に優越しているというイメージを打破した。⁽³⁴⁾その上、鷗外は当時盛んであった黄禍論を次のように捉えた。

「戦争が我に不利」であれば、白人は「黄禍の一部分を未萌に厭伏し」、我が「凱歌を唱へ」たら、「我勝利の結果を、成るべく縮小」しようとする。しかも鷗外は、このような「黄禍」をめぐる西洋人の二重基準を、詩文の中で「勝たば黄禍、負けば野蠻」と表現した。これは一言で黄禍の内実を喝破したとも言えるだろう。

そして鷗外は長期にわたる政府の欧米追従の外交政策をも批判した。鷗外によれば、西洋人が「支那に心酔して日本を憎悪する」理由は、西洋人にとつて、中国より「日本が当面の敵」だからである。鷗外によれば、日本が「往々白人等と塵を並べて進んで」、「却つて他の黄色種族と争」い、「現に英国と同盟し」ても、「一般の白人種は我国人と他の黄色人

とを一くるめにし、「一種の厭悪若くは猜疑の念」があった。ここで鷗外は、明白に日本人の「名譽白人」という自己陶醉を斥け、白人との闘争が避けられないと結論した。なぜならば、白人が日本人と他の黄色人種とを一括りしても、黄色人種の中で中国人と日本人を分けても、日本は終始「当面の敵」であるからだ。この点を深く認識したがゆえに、鷗外は「吾人は嫌でも白人と反対に立つ運命」を持つと覚悟しなければならぬと、当時の日本人に伝えた。

一方、外交の面に重点を置いた『黄禍論梗概』と反対に、森鷗外のもう一つの講演『人種哲学梗概』における人種論批判は、主に論理的・哲学的な内容を備えている。「最も重大なもの、ARIA人種が唯一の能化の民。他を開化する力を備へたる民だといふ一事にある」というように、ここで鷗外の批判の矛は「アリア人種優越論」に向いたのである。

「アリア人種優越論」は一八世紀の西洋の言語学者たちのインド研究による発明であるが、それを系統化・論理化した最初の歴史学者は「人種哲学の父」とよばれているフランソワ外交官ゴビノー (Joseph Arthur Comte de Gobineau, 一八一六—一八八二年) である。まさにその意味では、鷗外はゴビノーの人種哲学を例として批判を加えたのである。

ゴビノーは、従来の歴史学者が論じた文明の崩壊の理由、例えば宗教上の熱衷、奢侈、風俗の頹敗、不信仰、政治の退歩などを斥けた上で、真の文明の崩壊の理由は人種の退化だと主張した。人種の退化とは、人種の血管の中にもはや同一

の血が流れておらず、相次ぐ混血によって徐々に人種的価値が変化したことを指す。ここでいわゆる「血」とは、精神と物質の両方の意味がある。一方では、いろいろな人種の血はそれぞれの価値がある。他方では、混血によってその価値を互いに与えられる。その上で、ゴビノーは、あらゆる文明を征服人種と被征服人種の弁証法に従って進んで行くこととして捉えた。征服人種は、被征服人種を支配したが、次第に、異人種との混血が始まり、征服人種自身の血の純粋性を失い、退化をもたらす。そして、被征服人種は逆に、征服人種の血を受け入れるため、文明化する。ゴビノーによれば、白人種の最高存在アリア人種はすべての文明の源であり、黄色人種と黒色人種はアリア人種との混血を通してしか文明化できなかつたという。

ゴビノーの論理に対して、鷗外は三つの方面から反論を加えた。

まず、鷗外はゴビノーの人種哲学を「我田引水」と「身勝手思想」とし、「初め地球中心のであった天体論が倒れて、次いで人類中心のであった創世記が潰れたやうに、アリア人種中心的人種論も、まだ出来たての中に、早くも撼き出しはしますまいか」といったように、人種哲学が歴史上一時的に流行っている思想にすぎないと考えた。

つぎに、鷗外は、日本の文明開化の成就を事例として、ゴビノーの人種哲学の虚妄性を指摘した。もともと日本と西洋は同じ「能動的地位に立」つと考えた鷗外にとって、日本の

「文明開化」の成就是西洋人と人種上の違いによって否定できない事実である。鷗外は、もしゴビノーが「もつと長生をしたら」、「我国の維新後の政治を見たならば」、「日本人種にARIA人種の血がはいつて居るといふ証拠を尋ね」なければならぬと風刺した。

最後に、鷗外の人種決定論への批判は、ただゴビノーをはじめとする西洋人の「アリア人種優越論」だけではなく、日本人の学者も疑問なく「アリア人種優越論」をそのまま受容したことも含んでいた。後述するように、「日本人種アリア起源説」を唱える田口卯吉に対して、鷗外は「日本人がアリア人種だと云ふ論断がしてある、そしてその理由として挙げてある言語学上の事実が、問口ばかり広くて手薄である、学者はあんな軽率な論断をしては困るぢやないか」という厳しい批判は、そのためである。

従来、以上の二つの講演だけによって議論された上で、日露戦争期に「反人種主義」としての鷗外像が捉えられてきたが、衛生学者としての鷗外の人種への認識は見落とされた。以下、科学者・衛生学者としての鷗外はどのように人種問題を扱ったのかを考察する。

『衛生新編』第五版の改稿にあたって、鷗外は「種族」という論文を加えた。ここで鷗外は「人種衛生」という新概念を衛生学の重要な課題として取り上げた。鷗外によれば、このような「人種衛生」の目的は、人種の「退化ヲ研究シ之ヲ防遏スル」にあるのだという。「人種」は二つの意義があり、

一つは「形体学上ニ部門ヲ設ケテ種」、もう一つは「祖先ノ相親近セル数多個人ノ集団」である。鷗外が取り上げたのは後者、つまり「個人ハ死シ親戚ハ死ス」が、「種族独リ能ク存ジ繁殖シ遺伝シ」、「新ナル個人ヲ継続出生セシム」という社会有機体的色を帯びる「人種」である。こうした人種は、「外境ノ勢力ニ対シテ相似タル反応ヲナシ其ノ外力ニ克服」し、「特有ノ生活状態ヲ継続スル傾向」を示す。

そして人種の退化の防止に対して、鷗外は「数ノ存続」と「質ノ存続」という二つの方面に分けて論じていた。

まずは、「数ノ存続」である。鷗外は「人類全数ハ既ニ大ナリ之ヲ増殖スルコトヲ要セズ宜シク優勝分族（白人、黄人）ノ為ニ死数ヲ減ジ産数ヲ増シ且弱者ノ繁殖ヲ防遏スベキノミ」と考えた。

ここで鷗外は、「適者生存・優勝劣敗」の社会進化論に基づき、個人であれ人種であれ、優勝の方のみ存続の権益を与えると主張する。このような社会進化論は、帝国主義国家による侵略や植民地化を正当化する論理になるとされ、もともと「黄人」と「黒人」を差別対象としたが、鷗外は「黄人」と「白人」を同じ「優勝分族」としたことによって、その矛盾を解消した。

次に、「質ノ存続」である。鷗外は「遺伝ノ下降傾向ヲ防止スベシ」と考え、「男子五十五歳以上、女子四十歳以上ノ産児数ヲ小ニシ」といったように、出産期のコントロールを主張した。また、鷗外は「前後産間二年ヲ下ラザラシメ酒癖

ヲ禁ジ」と提唱し、「禁酒」を人種の「質」を確保するための手段として挙げた。しかし、ここで最も注目すべきなのは、鷗外が異人種間の混血の禁止をも人種退化の防止策としていたということである。鷗外は「白人輩ハ著々之ガ手段ヲ施セリ独逸人ハ東阿弗利加ニ於イテ独逸人ト土人ト婚嫁ヲ禁ジ」という植民地の政策を参考にした上で、「混血ハ之ヲ避クルヲ要ス」と考えたのである。

文明論者の鷗外はゴビノーの論じた混血による人種の退化に対する反対の立場をとったが、衛生学者としての鷗外は、異人種間の混血による人種退化を信じていた。ただし、「東阿弗利加ニ於イテ独逸人ト土人ト婚嫁」は白人と黒人との混血である。同じ「優勝分族」である白人と黄人との混血は、この事例に属さない。鷗外によれば、「白人ト黒人トノ混血児ハ靈智黒人ニ優ルト雖、繁殖力微ナルガ如シ白人ト銅色人トノ混血児モ亦同じ白人ト黄人トノ混血児ハ結果未詳」という。ここで鷗外は黒人種を劣等人種としたばかりではなく、その科学的な根拠をも以下に挙げた。「人ノ進化退化」という節に、鷗外はつぎのように述べている。

「白人ト黄人トハ漸ク地盤ヲ得、黒人等ハ漸ク之ヲ失フ、分族ノ高下ハ天才ヲ出ヌ多寡、獼猴ヲ去ル遠近、血清組成ノ単複ヲ以テ辨ズ可シ」

「獼猴ヲ去ル遠近」、「血清組成ノ単複」といった西洋の生

理学の基準は、鷗外の人種の優劣観の基礎となった。ここにこそ、鷗外の西洋人種論批判の限界が見える。つまり、鷗外は黄色人種に対する人種差別に反対するが、その人種差別を支えた生理学・生物学といった科学的な根拠に対して、鷗外は根本的な疑問を抱かなかつた。それどころか、それを借用し、黒人に対して差別しようとした。だからこそ、黒人との混血を禁じること、鷗外は人種退化の一つの策として挙げたのである。

以上から見てきたように、鷗外にとって、「人種」は二つの黄禍・人種「梗概」の講演によって終わってはいない。論文「種族」を通して、鷗外は積極的に「種族衛生学」をヨーロッパの衛生学の最新成果として日本に導入した努力が窺える。しかし、「種族」において、鷗外が敢えて白人種と黄人種を「優勝分族」としたのは、黄人種として「種族衛生学」に隠された人種差別に対する危機感を示したとともに、「人種優劣論」という前提を認めたとと言える。鷗外の二篇人種・黄禍「梗概」によって反人種差別主義の鷗外像は形成されていたが、衛生学者としての鷗外は、生理・衛生学の論拠によりつつ、白人種と黄色人種が同様な文明的な人種と主張する一方、黒人種に対する差別を保留していた。よって、鷗外は人種・黄禍論に対して非常に憤慨を表したが、彼自身も衛生学による「人種差別主義」に固執したことも確認できるだろう。

第二節 田口卯吉の場合——脱亜論の転回——

黄禍論の研究史のなかで、田口卯吉は常に日露戦争期における「日本人アーリア人種起源説」の提唱者として挙げられており、それを人種的「脱亜論」として捉えられてきた。⁽⁶³⁾しかし、田口の文明史論を振り返ると、人種論と文明史論との関係性が薄いあまり、その初期の人種論は主に内地雑居論に求めなければならなかった。そのなかで、田口は「日本多民族起源説」を唱え、内地雑居論の歴史的根拠を求める一方、他方では自由主義経済論を掲げ、文明開化と殖産興業を推し進め、人種よりも利益を重視していた。⁽⁶⁴⁾

実は、田口の人種論の重視、そして彼の史学に取り組みたのは、該当期の「日鮮同祖論」の影響のためであった。多くの研究が指摘した通り、「日鮮同祖論」は単なる人種の研究だけではなく、朝鮮半島進出正当化のイデオロギーとして機能したこともあった。田口は「日鮮同祖論」を全面的に認めたとはいえないが、自ら「日本人種起源論」を提出した。論説「居留地制度下内地雑居・第一」の冒頭において、田口は「余は旧史を考究し、我日本人種は全く土爾基ホンガリー等と同族なることを発明するを得たり。其証実に巨多なり」と、「日本人種匈奴起源説」を唱えはじめた。⁽⁶⁵⁾そこで田口は世人がベルシアとギリシア、インドとイギリスとの関係を例として、「亜細亞人種は決してアリアン人種に及ばざる」としたのに対して、田口は「土爾基の歐洲に侵入したる」と「ホンガリー人の澳國に雑居したる」歴史を踏まえ、必ずしもそ

うではないと考えた。田口によれば、彼らは「独立して以てアリアン人種と対峙せり」、「歐人の亜細亞に入るもの未だ此の如き勢力」はなかったという。ここで田口は、世界史を人種間の競争史として捉えようとした。ただし、「日本人種」と「同族」である「土爾基ホンガリー」の「歐洲に侵入」し「アリアン人種と対峙」した歴史を裏付け、「我日本人種は技芸に於ても、學術に於ても、工業農業等に於ても、決してアリアン人種を恐る、所以なし」と、日本人種は優秀な人種だと田口は主張する。⁽⁶⁶⁾

実際は、日清戦争で日本が優位に進む中で、田口の「日本人種匈奴起源説」はもう一つの機能を果していた。一八九四年九月、連合艦隊は清国の北洋水師を撃破し、朝鮮半島を完全に統制し鴨緑江を渡る際、田口は「支那は多くの償金を払ひ得べき国格にあらず」という文章を載せ、「償金」より「土地を以て」清国の「勢を止む」とし、「例令支那政府にして如何に内政を改良するも其歳入の総額多く我邦の歳入に超過するを得ざるまでに土地を割かしむべき」だと、清国の復讐を懸念したのである。⁽⁶⁷⁾一月、清国の講和の申出は通達され、田口は論説「講和の条件」を著し、北京に入城するまで、講和会議を開いてはならないとした。また、徳富蘇峰をはじめとする台湾・遼東半島を割譲する主流意見とも異なり、吉林・盛京・直隸などの東北三省を割譲せよと力説した。

これらを背景に、田口が敢えて「日本人種匈奴起源説」とったことは、それ自体が意味深いものであったと考えなく

てはならない。なぜならば、日本人種の起源を歴史上で中国東北三省に起源を持つ匈奴人種に求める田口にとつて、それは戦後の土地割譲の訴求と関わるからである。⁽²¹⁾

下関条約締結後、田口は早速「日本人種論」を起草し、歴史上匈奴人種の功績を賛美する一方、「言語風俗其他に就いて観察するときは、我日本人種は匈奴人種の一族たる」と、日本と匈奴との人種の同一性を強調した。しかも「我日本人種は其最も発達開進し」、「土爾基匈牙利も亦我日本の同胞たることを思へば、我日本人種たるもの豈に相提携して世界に立つ」と、田口は日清戦争の勝利の気運に乗じて世界進出の期待を抱くようになった。⁽²²⁾

しかし、田口が想定しなかったのは、ドイツ、ロシア、フランスが、下関条約に基づき日本に割譲された遼東半島を清国に返還することを要求し、日本の膨張を抑制するためのいわゆる三国干渉が起こり、「黄禍論」を打ち出したことである。「日本に対抗して、ヨーロッパの利益を守るため、ヨーロッパが連合して行動を取る」、「巨大な黄色人種の攻撃からヨーロッパを守る」ことが、ロシアの将来の偉大な任務である」と、ロシア皇帝宛ての書簡に書かれたように、ドイツ皇帝は明らかに日本帝国の膨張を「黄禍」と見なしていた。⁽²³⁾

すでに述べられたように、当該期における「黄禍論」は列強の東アジア進出のために打ち出された帝国主義の政治的なスローガンとされたが、ここで注目したいのは、「黄禍」という概念自体の形成は異人種のヨーロッパ侵入の歴史的記憶

に根ざしているということである。⁽²⁴⁾ とりわけ、「上帝の鞭」と呼ばれている匈奴や蒙古などの北方アジアの遊牧民族に対する恐怖と危惧の歴史的記憶は、ヨーロッパ人の「黄禍」認識に大きな役割を果たしてきた。⁽²⁵⁾ かかる状況で、「他の人種来りて我匈奴人種を害せんとすれば、余は匈奴人種として戦ふべし」というような田口の決然たるモットーは逆に戦後に盛り上がったいた黄禍論に一層拍車をかけるようになった。その意味では、田口の「日本人種匈奴起源説」は時宜に適しないことといえよう。黄禍論の圧力を意識した上で、田口は日本人種の起源を考え直さざるをえなかった。

一九〇四年、日露戦争を背景に白熱していた「黄禍」を解消するため、田口は『破黄禍論 一名日本人種の真相』を出版した。該当書によれば、歴史上ロシアは匈奴、韃靼、蒙古人種に征服され、なかでも韃靼人種はスラブ人種と雑婚し、「露国の華胄」のみならず、「其下層には韃靼人種の血を混入し」、「黄禍と云へる語にして韃靼人種の侵入を意味するならば、余は却て露国が満州を占領するを以て黄禍なり」という。ここで田口も韃靼人種の侵入を「黄禍」としていた。ただし、田口はロシアと韃靼との混血関係を強調し、日本は黄禍ではなく、ロシアこそが「黄禍」であると断言する。かくして、田口は日本人種と匈奴、韃靼、蒙古人種とを区別し、比較言語学の根拠により、日本人種起源がアーリア人種であると主張するようになった。

田口は「文法に於いてラテン、ギリキ、サンスクリット

とヨウロッパ諸国との間に此の如き相違あり」とし、「アリアン語族の根本たる以上諸国の文法も我が日本の文法に類しヨウロッパ諸国と異なるを見るべし」と断言した⁽²⁹⁾。しかも田口は西洋の言語学者たちが「今や自らアリアン人種と称して、我々をチユラニヤンと称するは、我々の先祖を横取りして、我々を末家筋に貶す」とし、「之を自己の祖先と爲すに至りては其の誤謬を表白せざるべからず」と批判したうえで、「サンスクリット等の文法は日本文法々中に無疵に存生して居るを以て、我々はヨウロッパ人に比すれば本家筋に近きもの⁽³⁰⁾」だと、日本人種とアリアン人種との近縁性を強調した。故に、西洋人が日本を「黄禍」とする非難は「全く無根の流説」、「事態の真相を解せざる杞人の憂に過ぎ」ないものであったと田口は当該書の冒頭において主張する⁽³¹⁾。実際には、黄禍論の圧力があつたからこそ、田口は「日本人種起源説」を打ち出したのである。その意味では、田口の人種論は外交論の色を帯びていたといえよう⁽³²⁾。

しかし、田口の説は言語学の根拠が弱いこと、そして民族的自尊心への配慮のために「日本人種アリアン起源説」は広く批判された。一方、日露戦争において日本が優位に進む中で日本人種の優越性に「日本人種アリアン起源説」を裏付けさせることもなくなり、田口はそれを考え直さざるを得なかつた。

一九〇五年二月、田口は史学会で生涯の最後の講演「日本人種の研究⁽³³⁾」を行った。田口によれば、元来西洋人は「アリ

アン人種を一番エライ人種」とし、「モンゴリヤ人種」が「拙もアリアン人種には勝てるものではない」としていたが、日露戦争における日本の勝利のため、「彼等は今や黄色人種にしてエライ」とするようになった。従来、日本人の優越性の確保として論じられていた「日本人種アリアン起源説」について、「世界から軽蔑される氣遣ひがない」と、人種問題についての田口の圧力は戦争の勝利によって解除されたのである。田口の人種論は彼の急死のために懸案になってしまったが、「私はどうしても是位の大なる国民を作られる祖先は、其挙動は随分活発堂々たるもので、歴史上に名を残して居る位の人種でなければならぬ」という節から窺えるように、田口は日本人が優秀な人種という主張を持っていたことが想像に難くない。

第三節 高山樗牛の場合——アジア主義への接近——

従来、黄禍論の研究史では、高山樗牛が黄色人種大同盟を唱え、アジア主義者だったとされてきた。しかし、樗牛が最初に明治期の人種論争に巻き込まれたのは、「教育と宗教との衝突」をめぐる国体論争であった⁽³⁴⁾。その張本人は教育勅語の公定解説書『勅語衍義』（一八九一年）の執筆者で東京帝國大学時代高山樗牛の指導教官を務めた井上哲次郎（一八五六—一九四四年）であったが、後に「日本主義」を掲げる樗牛は「国体論」を唱える井上を継承して宗教批判を行っていた⁽³⁵⁾。

そもそも国体論者の基礎となつたのは、神話・神勅に依拠した「万世一系」の天皇制と、血縁による「家族国家論」である。⁽⁸⁸⁾例えば、『勅語衍義』において井上は天皇の統治権を「天祖天照大御神ノ詔ヲ奉ジ」という神話・神勅に根拠づけた一方で、他方では「皇統連綿、実二千五百五十年ノ久シキヲ経テ、皇威益々振フ」と、神話と歴史とを区別せずその連続性を強調し、⁽⁸⁹⁾皇室が日本を永遠に統治する歴史的・法的な根拠であるとした。そして「一国ハ一家ヲ拡充セルモノ」という喩えを通して、井上は皇室を国民の本家に位置付けた上で、「父母ニ対シテ一種特別ノ親愛ヲ感ズル」、「全く是レ自然ノ情ニ出ヅ」と、作爲的な要素を排除して、天皇と臣民との関係が西欧社会のような契約関係ではなく、自然性に徹底する親子関係であると強調した。⁽⁹⁰⁾かくして神話・信仰を共有し、そして血族を通して国民を繋がらせる国体論を支える前提は、日本の単一人種の構成論しからえな⁽⁹¹⁾い。

一方、このような国体論争ははじめ教育、宗教などの伝統文化的な領域にとどまっていたが、日清戦争後の台湾領有とそれに伴う日本の国民国家が帝国日本へと移行する状況で、日本帝国の海外膨張という国是は取り込まれていた。例えば、日本基督組合教会の牧師渡瀬常吉（一八六七—一九四四年）は「今や我が帝国は大に膨張せんとし、異種の民草をも加へて其の民と為さんとす、此の時に於て徒らに君民同祖の旨義を主張し同胞の意義を狭隘にせんと欲するは開国進取の精神を完うする所以に非ざる」と、国体論者による「君民同祖の

旨義」が海外拡張に反し、とくに台湾領有による新版図における異人種をどのように帝国の臣民に回収させるのか、という問題があると指摘する。それゆえ、渡瀬は「国祖崇拜の主義を主張する者に同ずる能はず」、「独り国祖崇拜を以て之に代へんと欲する」ことは、「立国の大本を堅うし建国の理想を實行するの障害」だと国体論を厳しく批判した。⁽⁹²⁾

そもそも幕末から明治初期に結ばれた諸条約の改正とその実施にともなう内地雑居、そしてそれによって出現する可能性のある「帰化人」が家族国家論のジレンマを呈していたが、ここで台湾植民地の獲得によって可視的に浮上してきた「異人種」問題があらためて国体論批判的になってしまったのである。⁽⁹³⁾

かくして国体論と異人種とのパラドックスを整合的に結びつけたのは、樗牛の論説「我が国体と新版図」であった。樗牛によれば、「我が国体の宇内に冠絶せる」且つ「天下無双」であるという。そして「我金甌無缺の国体」の基盤として、樗牛は「其の国民は概ね神孫皇族の末裔」に起因するのだと主張し、それを「外邦に見る如く、数多の異人種群集し、契約若は強迫によりて君臣の関係を定め」るものと「日を同うして論ずべからざる」とする。ここで一般的に論じられてきた国体論における「神国思想」と「家族国家論」は、樗牛の論説の冒頭で再確認された。

キリスト教徒の論難に対して、樗牛は「国家」という概念の再定義を通して反論を加えた。ここで樗牛は国家の「内面」

と「外面」をそれぞれ「平等性」と「差別性」から弁証的に捉えたのだが、「吾人の内面的生活の範囲を超えて、直に社会の実際の主義となり得るの時あるを信ずる能はず」と、その「内面的生活範囲」における「共同的理想」或いは「平等性」は「社会の実際の主義」の領域で論じられるべきではないと主張する。したがって、「国家至上主義は実践倫理の標準として認めらる、所謂世界的道徳なるものは是の如き実践主義の域内に於て、初めて其存在の意義を有」すると、樗牛は国家の「道徳」を「実践」に還元させようとしていた。ここで樗牛が批判したかったのは、まさに世界主義・平等主義を掲げるキリスト教徒らは、国家の「内面」と「外面」を渾濁したということである。

樗牛によれば、「国家は実権の上に立つ、実権の強弱は即ち勢力の範囲を規定す。苟も一国家を結成する所以の約束は、実際上是の実権に存す。故に国家と国民との関係は、即ち實際上全く権力関係に外ならず。是の如き関係は、人種、歴史等、種々の事情によりて親疎一ならずと雖も、要は主権を離れて団結無し」という。同論説の冒頭で樗牛は「金甌無缺の国体」を「一国と一家と」の関係として述べられていたが、ここでその逆面に転換させ、国家の結成が「実権」によるものだと考えた。よって、「家族国家論」に代わり、「一国が其の新版図に対し、其の属邦たるの実益を収めむと欲せば、主として権力関係を以て是れに臨まざるべからず」と、樗牛は「実権」を通して「新版図」を収容するほかないと主張する。

そもそも台湾割譲や韓国合併の前の日本が帝国という国家制度をとる以前から、自民族の優越性を前提とする「単一人種構成論」と侵略性を帯びる「多人種構成論」は併存していたという歴史的事実があった。この二つの理論はお互いに対抗しながらも、日本の知識人と政治家の中で相補い合いながら共存していた言説なのである。しかし、このような局面は日韓合併（一九一〇年）までしか維持されてこなかった。なぜならば、それまでの北海道開拓・琉球征服・台湾領有などに対して、「区々なる新版図」を人数上の少量として捉えてきたと反対に、朝鮮合併による帝国総人口は約三割を占めており、一千万以上異人種を帝国版図に吸収させた上で、「単一人種構成論」を堅持するのは無理だからだ。

よって、国体論争における人種問題と海外膨張との矛盾を意識した上で、樗牛も改めて神話研究を借りて「単一人種構成論」の解決策を求めようとした。一八九九年三月『中央公論』に掲載された「古事記神代巻の神話及歴史」は「一 概論」、「二 神代巻の神話」、「三 日本民族の起源及遷徒」の三節からなり、それぞれ研究方法、研究内容、研究結論という順に展開させた。従来、樗牛の「古事記神代巻の神話及歴史」は日本主義との関連で論じられてきたが、樗牛はその論説の本論に入る前、「茲に一言を要する事あり。人種問題を規定するの要件は、予が本論に於て関はれるもの以外にも是れあり」と提示したように、神話が人種を規定した手段として強調した。樗牛にいわせると、「日本民族の太古史に於け

る最も重要な問題」が「出雲民族及び天孫民族の故郷は何処なる乎」という。

樗牛はまず「古事記の神話は、淤能基呂島の成立と云ひ、伊弉諾尊の御滌と云ひ、菟和邇の話と云ひ、海に關するもの甚だ多し。其の神の名にも海に縁あるもの少からず」という。その上で、樗牛はさらに「最初の故郷は南太平洋」だと主張する。従来、樗牛の「古事記神代卷の神話及歴史」は神話研究史には高く評価されていたが、樗牛自身はその議論をより一步深く進めさせるかわりに、「植民的国民としての日本人」を書き、神話による日本人種南洋起源を借り、日本人の海外植民を鼓吹するようになった。

一八九九年三月に『太陽』に掲載された「植民的国民としての日本人」⁽⁶⁾で、樗牛は冒頭で「今や日本人は、植民的国民として自己の天職を試むべき機運に到着せり」と、海外植民を「自己の天職」とした一方、他方では「吾人の祖先が植民的民族として歴史上最も顕著なる成功を留めたるの事跡を緬思する、必ずしも閑事業に非ざる」と、神話研究の意義が海外植民にあるのだと解した。樗牛は神話研究の成果を引用しながら、「日本民族の幹部たる天孫人種と出雲民族とは、遠洋より来りて是の土に植民したる」とし、そもそも「雄心鬱勃たる冒險的民族」であり、その後の「神武東征」、「三韓討伐」などの事件からみれば、「爾來歴世の帝王、事に臨みて遠征を辞せず」、「征服的国民の意気尚ほ蔚然として盛なりしを見る」と賛称した。そして明治維新以来、「海外的精神の

勃然として国民の間に興起し」、「植民的事業は日本国民の先天的特性なることを自覚するは、事業の成功を期待する上に於て、国民の最も須要する所ならずむばあらず」と、樗牛は明治以来の海外進出を記紀神話に表現された「民族特性」に帰させたのである。

ここで注意すべきなのは、樗牛が「日本人種南洋起源説」を唱えたのは、朝鮮半島を中心とする「北進」政略が大きな挫折を経てから生じたことと深く関わっていることである。

一方では、日本は国運を賭けて日清戦争の勝利を収め、ようやく極東の大国の地位を確立した。他方では、三国干渉が起こり、西洋列強側が強く日本の膨張を警戒した。それゆえに、戦後「台湾経営」というスローガンの下、明治二〇年代に生じた「南進論」が明治三〇年代に台湾領有のためにいっそう議論を引き起こしつつあった。⁽⁷⁾「我国は今日に当たり、北守南進の国策を確定し、(中略)南方経営の実をあげ、以て国家百年の大計を講ぜざる可からず」と、当時の元老松方正義(一八三五—一九二四年)が言ったように、対露調和・対英対決を柱とする「北守南進」論は明治政府の最高指導部の主流意見となっていた。⁽⁸⁾

こうした機運に乗せて、「故郷への回帰」という形で語られた樗牛の「古事記神代卷の神話及歴史」と「植民的国民としての日本人」はそれぞれ「南進」の論理と実践として登場していたのである。

しかしその一方で、「北守南進」では、「南」の海洋に積極

的に進出を唱えながらも、「北」の大陸から消極的に退出すると意味するのではない。戦後の流行語「臥薪嘗胆」に象徴されるように、樗牛は、むしろ復讐するために一時的に耐えることを選択したといえよう。実は、神話研究に基づいた「南進」を呼びかけていると同時に、樗牛は世界的規模な「人種闘争」を「北守」の歴史的根拠として模索している。以下、「北守」をめぐる樗牛の語りを絞って議論を進めていく。

神話研究による人種論と同じく、歴史研究といいなながら、樗牛の関心の所在は歴史そのものにあるのではなく、「人種の研究豈史学当眼の急務にあらずや」というように、「歴史」を研究する目的は、「人種の活動」を明らかにすることである。「南進論」について、樗牛は政府側と同じ姿勢を保ちながら、中国大陸の局勢をめぐって政府側とある程度の距離を置いた。日清戦争中に政府はできる限り清国との「同人種」的な言説を抑制し「文明」という普遍的イデオロギーによる戦争の正当化を行ったが、三国干渉は白人種と黄色人種との対立図式を刺激し、「人種」を軸とするアジア主義を台頭させたのである。かかる情勢下、政府は資金調達や条約改正などの外交的難題に迫られて対外調和の姿勢を示したが、より遠い将来に列強との衝突を予想した樗牛は、アジア主義の道を選んだ。そして同人種と見なされた日清戦争の再評価も樗牛の世界史の新課題となった。その論説「人種競争として見たる極東問題」に、樗牛は以下のように述べた。

翻つて日清戦争の顛末を沈思すれば、吾人は撫然として長大息するを禁ずる能はざる也。(中略) 吾人は是の義戦を闘はむが為に支那帝国を再び起つ能はざるべく打撃したるに非ずや。吾人実に是を悲むなり。支那は吾人と同人種に属する唯一の帝国にあらずや。ツラン人種の国家は、極東以外に於て全くアールヤ人種の為に皆滅せられたり。吾人の日本と支那帝国とは、世界に於ける最後のツラン人種の国家として、相抱擁し、相提携して其の運命を共にすべきことを誓ふべきに非ずや。支那は吾人の唯一の同胞なり。(中略) 嗚呼、支那を半死せしめたる吾人は、自ら其の一手を断ちたるものに非ざる乎。思つて茲に至れば、吾人の誇とする所の日清戦争は、畢竟極東の奇禍、ツラン人種の一大不幸に非ずや。

文明と野蛮との対決の「義戦」として捉えられてきた日清戦争であったが、樗牛は「極東の奇禍」、「ツラン人種の一大不幸」とし、逆に「唯一の同胞」である「支那帝国」と「相抱擁し、相提携して其の運命を共にすべき」と唱えた。なぜならば、「世界の大事の、道理によりて為されず、人道によりて為されず。一に利害の為に為さるゝことと是れ也。人種競争の利害の最も大なる競争なり」というように、樗牛は人種闘争を国家の最大の課題として挙げたからだ。かかる視点によれば、樗牛は「国民よ、異人種の同盟の永続し難き」と、政府側が主導する日英同盟に反対する一方、「大スラヴ主義

の偉大なる運動に注目せよ、(中略)幾多の土地風土民族を包括して、茲に至強至盛なる人種的感情の磅礴」と、「大スラヴ主義」の連合に対する羨望の情を表わした。⁽¹⁴⁾そして「日本が世界歴史中の一国として目覚めたる時は、即ちチュラニアン人種は欧亚衝突に於ける其の代表者として彼を要したる時なり」と、樗牛は日本人の「チュラニアン人種」のリーダーとしての自覚を持たせようとした。ここでこそ、従来「我レハ心ニ於テ亜細亞東方ノ悪友ヲ謝絶スルモノナリ」という福沢諭吉の「脱亜論」と行き別れ、樗牛は「唯一の同胞」である「支那帝国」と連合するアジア主義へ傾斜し、西洋列強と対抗する道を選んだのである。

結び

竹沢泰子によると、英語の Race という概念は「小文字の race」、「大文字の Race」、「抵抗の人種 (Race as Resistance)」と三つの位相によって一つの球をなすように成立する。「小文字の race」とは、近代化や欧米からの人種分類論の受容などによる影響とは無関係に、それぞれのローカル社会において右のように定義した特製が見られる人種である。「大文字の Race」とは、世界中の人々のマップピングと分類を意識して高知された科学的概念として流通する人種である。また「抵抗の人種 (Race as Resistance)」とはマインオリティを動員することにより生成・強化される人種であ

る。⁽¹⁵⁾竹沢の理解に従えば、黄禍論に表象される黄色人種は「抵抗の人種」として理解されるほかならない。なぜならば、黄禍論をめぐる攻防のなかで、マインオリティへの動員効果が最も重視されたからだ。

明治日本の場合に即して言えば、人種差別そして西洋優越論に表象された黄禍論は日本にも伝えられ次第、大きな議論を巻き起こした。大別して言えば、黄禍論をめぐる、民間の「アジア主義論」と政府側の「文明開化派」という二つの対立的な主張があった。前者は「黄人種団結」を強調し、白人と対抗することを選んだが、後者は西洋文明をさらに吸収し、列強への刺激を避けて友好関係を築こうとした。そのほか、黄禍論に対して日本人が白人だという異色の対応案「日本人種アリア起源説」を田口卯吉も唱えたのである。

従来の近代日本の思想史研究では、西洋・白人と対抗することで、アジアの自由や有色人種の解放といった反人種主義は重要な課題として扱われてきたことは周知の事実である。

特に第一次世界大戦後、パリ講和会議の国際連盟委員会で日本が人種の差別撤廃提案の最初提出者として重要な意義を持つていた。よって、三国干渉以来、黄色人種への差別に最も集約された言葉「黄禍」については、有色人種解放・人種差別撤廃用語の原型として語られてきた。⁽¹⁶⁾

しかしその一方で、本稿が明らかにしたように、日本黄禍論批判をめぐる言説には、日本は人種主義そのものを批判対象としたのではなく、逆にそれを借用して帝国秩序を構築し

ようとした。例えば、鷗外はアリア人種優越論を批判した一方、衛生学の見地から黒人に対する差別を保留した上で、日本人と西洋人が同等的優秀な人種として主張したのである。田口はもともと朝鮮半島進出を正当化した「日鮮同祖論」から示唆を受け、中国東北三省（満州）を割譲することを日清戦争の講和条件として「日本人種匈奴起源説」を訴えたが、黄禍論という外交圧力の下、田口は「日本人種アリア起源説」を唱えはじめた。「大アジア主義」を掲げていた高山樗牛はそもそも「日本主義」に固執しており、単一人種構成論を強調し、一切の人種的異質を排除しなければならないと考えたが、台湾領有とそれに伴う「異人種」を帝国に回収させるために、「多人種構成論」を提唱しはじめた。黄禍論という外交的圧力の下、「故郷への帰還」という形で「日本人種南洋起源説」を唱え始めた一方、他方では西洋列強による「支那分割案」を危惧した上で、「大アジア主義」を訴えたのである。

以上から見てきたように、明治末期における黄禍論批判をめぐる諸言説には、西洋留学体験をした「文明開化」の代表人物森鷗外であれ、同人種同盟を訴えた大アジア主義の高山樗牛であれ、そして当時の言論界に異色の存在であった「日本人種アリア起源説」の田口卯吉という三者、一見すれば大きく異なっていたが、人種主義はそれらの認識の根底になされている。それは、おそらく日本が国民国家から帝国主義へと移行する文脈で検討しなければならない。つまり、黄禍

論に反照された以上の差異は、帝国のあり方をめぐる差異であり、帝国そのものに疑問を抱かなかったのである。よって、明治末期における黄禍論への対応には、近代国民国家建設の模索の様子を反映する一方、他方では転換期における帝国日本不安定性をも呈してきたとも考えられる。

註(1) 『世界大百科事典』第九卷（平凡社、二〇〇七年改訂）、二九五頁。

(2) 外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『新版・日本外交史辞典』（山川出版社、一九九二年）、二七六～二七七頁。

(3) 橋川文三『黄禍物語』（筑摩書房、一九七六年）、七頁。

(4) 同右。

(5) 同右。

(6) 同右、七～八頁。

(7) 同右、八頁。

(8) 同右。

(9) 同右、八～一四頁。

(10) 同右、一四頁。

(11) ハインツ・ゴルヴィツァー『黄禍論とは何か』（瀬野文教社、草思社、一九九九年）、一一頁。

(12) 同右、一一頁。堅田智子「アレクサンダー・フォン・シー

ボルトと黄禍論」『上智史学』（第五七号、二〇二二年一月）、一〇～一一頁。また、ゴルヴィツァー以外、黄禍論に関する新

版・日本外交史辞典、松村正義の見解は、同論文の九～一一頁を参考した。

(13) 前掲書ゴルヴィツァー、一三～一四頁。

- (14) 同右、七〇八頁。
- (15) Victor Kiernan, *The Lords of Human Kind: European Attitudes to Other Cultures in the Imperial Age*, London: Serif, 1995, p179.
- (16) 同右。
- (17) 同右。
- (18) 同右。
- (19) 同右、二三〇頁。
- (20) サイドのオリエンタリズム批判のまとめ方について、武藤秀太郎『近代日本の社会科学と東アジア』（藤原書店、二〇〇九年）、九頁によるもの。
- (21) サイド『オリエンタリズム』（今沢紀子訳、平凡社、一九八六年）、三〇五〜三〇六頁。
- (22) 周寧『天朝遙遠——西方的中国形象研究——』・下篇（北京大学出版社、二〇〇六年）の第六編第二章「野蛮主義信条下的中国形象」、七二六〜七四七頁に詳しく。また、Victor Kiernanやサイドの黄禍論に関する見解は、同書三五五〜三五六、七二六頁を参考した。
- (23) 同右、七八八頁。
- (24) 同右『上篇』、三二四頁。
- (25) 楊瑞松「尔有黄禍之先兆、尔有種族之勢力——「黄禍」与近代中国国族共同体想像——」『国立政治大学歴史学報』（第二六号、二〇〇六年一月）、八四〜九六頁。また、黄禍論に関するVictor Kiernan、周寧とサイドの見解について、同論文六九〜七二頁を参考した。
- (26) 同右、九七頁。西洋人によれば、「黄色」は劣等人種の表象とされてきたが、中国歴史の伝統における「黄色」は皇室の象徴として理解され、高尚、富有、尊貴といった積極的意味を有する。したがって、中国人は黄色人種というイメージを積極的に利用し、黄帝との関係さえ強調し、自己の民族像を作り出そうとした。沈松橋「我以我血薦軒轅——黄帝神话与晚清的国族建構——」『台湾社会研季刊』（第二八号、一九九七年二月）、一〜七七頁。孫隆基『清季民族主義与黄帝崇拜的发明』『歴史学家的経緯』（広西師範大学出版社、二〇〇四年）、一〜二二頁。坂元ひろ子『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー——』（岩波書店、二〇〇四年）、五九〜六八頁を参考。
- (27) いわゆる近代中国の「種戦」思想。前掲論文楊瑞松、七七〜八四頁。
- (28) この点について、アメリカの中国研究者アリフ・ダーイク (Arif Dirlik) にも指摘された。Arif Dirlik, *Chinese History and the Question of Orientalism*, *History and Theory*, in *History and Theory* 35 (4), 1996, pp95-117. 前掲論文楊瑞松、七二頁。
- (29) 飯倉章『黄禍論と日本人——欧米は何を嘲笑し、恐れたのか——』（中央公論新社、二〇一三年）、九〜一〇頁。
- (30) 飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説——』（彩流社、二〇〇四年）、四二頁。
- (31) 同右、四三頁。
- (32) ここで問題提起として、水野守「越境」と明治ナショナリズム——一八八九年条約改正問題における政教社の思想——『大阪大学日本学報』（第二二号、二〇〇三年三月）、三九頁からヒントを頂いた。
- (33) 前掲書橋川文三、三四、四四、四六頁。
- (34) 山室信一『思想課題としてのアジア——基軸・連鎖・投企——』（岩波書店、二〇〇一年）、七二頁。

(35) 同右、七一―七二頁。

(36) 前掲書飯倉章(二〇〇四年)、一〇六―一〇七頁。

(37) 同右、二四頁。

(38) 当該期における黄禍論とアジア主義の關係については、廣部泉『人種戦争という寓話——黄禍論とアジア主義——』(名古屋大学出版会、二〇一七年)の第一章「日清戦争と日露戦争・日本脅威論の形成」、二二―二五頁、前掲書山室信一、六四―六六頁、前掲書飯倉章(二〇〇四年)、一〇一―一〇四頁に詳しい。

(39) 中村尚美「日本帝国主義と黄禍論」『社会科学討究』(第一卷第三号、一九九六年三月)、二八九頁。

(40) 国民国家の成立については、西川長夫の諸研究は良い参考となる。特に『国境の越え方——比較文化論序説——』(平凡社、二〇〇一年)、『国民国家論の射程——あるいは「国民」という怪物について——』(増補版、柏書房、二〇一二年)に詳しい。国民国家と帝国意識との關係については、桂島宣弘「一国民思想史の成立——帝国日本の形成と日本思想史の「発見」——」渡辺公三、西川長夫編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』(柏書房、一九九九年)、一〇三―一二六頁、川村湊「近代日本における帝国意識」北川勝彦、平田雅雅編『帝国意識の解剖学』(世界思想社、一九九九年)、一六七―一九四頁などが参考となる。

(41) 国民国家日本から帝国日本への転向、そしてそのなかで「人種主義」から見えた思想的意義については、世紀転換期における国粹派に関する水野守の諸研究からヒントを頂いた。水野は、従来「当該期のナショナリズムを『健全』から『特殊』への転位として論じてきた『ナショナリズム論』について、『国民国家の『健全性』を描きかねない』とする一方、「帝国

の記憶を忘却させ」、「且つ残存する帝国の暴力を見過」する恐れもあると指摘する。かかる視点をもって、水野は志賀重昂(一八六三―一九二七年)の南洋巡行を追いながら、早期明治日本の帝国意識を掘り出す作業を行った。水野守「志賀重昂『南洋』巡航と『南洋時事』のあいだ——世紀転換期日本の「帝国意識」——」『大阪大学日本学報』(第二〇号、二〇〇一年三月)、八九―一二二頁。本稿も当該期における黄禍論言論空間での人種意識に着目し、先行研究における「反人種主義」を強調しすぎること、明治日本の帝国意識を希薄化するおそれがあると指摘したい。また、水野守は志賀重昂だけではなく、三宅雪嶺(一八六〇―一九四五年)、長沢別天(一八六八―一九九九年)などの国粹主義的知識人を取り上げ、「国粹主義」の形成が当初から当該期の東アジア秩序と人種間対立への関心に起因し、「この人種間対立が白人種対黄色人種という図式だけでなく、黄色人種間の対立」もあつたことを論じた。水野守「政教社「国粹主義」の展開——「人種主義」との関わりについて——」『移民研究年報』(第一二号、二〇〇六年三月)、一三一―一四〇頁。それより詳しい論考、前掲論文水野守(二〇〇三年)、同「長沢別天の人種競争論——一八九―一九三年の在米経験を手がかりに——」『歴史評論』(第七一七号、二〇一〇年一月)、七九―九四頁が挙げられる。

(42) 「日本人種論」を総括する作業は、今まで幾度も行われてきた。例えば、歴史学・人類学・考古学を総合的に検討した工藤雅樹『日本人種論』(吉川弘文館、一九七九年)、小熊英二『単一民族神話の起源——「日本人」の自画像の系譜——』(新曜社、一九九五年)、そして人類学の形成過程を重点に置かれた寺田和夫『日本人の人類学』(思索社、一九七五年)、吉

- 岡郁夫「日本人種論争の幕あけ——モースと大森貝塚——」
 (共立出版、一九八七年)、坂野徹「帝国日本と人類学者
 一八八四—一九五二年」(勁草書房、二〇〇五年)などが挙
 げられる。
- (43) 富山一郎「国民の誕生と「日本人種」」『思想』(第八四五号、
 一九九四年四月)、五〇—五一頁。
- (44) 高橋義雄『日本人種改良論』(出版者 石川半次郎、
 一八八四年)。
- (45) 雨田英一「福沢論吉の「丸裸の競争」と「人種改良」の思想」
 『東洋文化研究』(第二号、二〇〇〇年三月)、三九七頁。
- (46) 前掲書飯倉章(二〇〇四年)、二四頁。
- (47) 前掲書飯倉章(二〇〇四年)の第二章「ウイルスヘルム二世
 と黄禍論の起源」、四五—七六頁、同(二〇一三年)、四一—
 六〇頁、前掲書ゴルヴィツァーの第五章「黄禍論をめぐるド
 イツでの議論」、一七二—一三六頁。
- (48) 前掲書山室信一、八—一二、五四—六五、一三六—一四二
 頁。山室信一の意見は、前掲論文水野守(二〇一〇年)、
 八〇頁による再引用。
- (49) 「人種主義」を東アジア内部の秩序に置かれて考察し、日
 本人の人種的優越意識の形成過程を明らかにするのは、本研
 究と水野守の国粹主義に関する諸研究(二〇〇一年)、
 (二〇〇三年)、(二〇〇六年)、(二〇一〇年)は共有するこ
 とである。ただし、「越境」、「移民」、「探検」などの、明治
 知識人の内在的に捉えられた歴史経験を研究対象としたこと
 と異なり、本研究は、黄禍論という外圧の下、明治知識人の
 反応を研究対象とした。
- (50) 森鷗外の人種観は、拙稿「森鷗外と人種・黄禍論——戦争、
 文明、衛生学の視点から——」『阪神近代文学研究』(第一八号、
 二〇一七年五月)、一—一四頁を参考。
- (51) 森鷗外「人種哲学梗概」『鷗外全集』第二五卷(岩波書店、
 一九七一年)、五〇三—五三三頁。以下引用は略す。
- (52) 森鷗外「黄禍論梗概」『鷗外全集』第二五卷、五三七—
 五六八頁。以下引用は略す。
- (53) 森鷗外「人種哲学梗概広告文」『鷗外全集』第三八卷、
 六二—六五頁。
- (54) 野村幸一郎「アジアへのまなざし——鷗外・天心の黄禍論
 批判——」『文学』(第八卷第二号、二〇〇七年三月)、一〇六
 頁。
- (55) 森鷗外「黄禍」うた日記『鷗外全集』第一九卷、一六一頁。
 それについては、レオン・ポリアコフ『アリアア神話——
 ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉——』(ア
 リア主義研究会訳、法政大学出版局、二〇一四年)を参考。
- (57) ゴビノーの人種論に関する見解は、長谷川一年「アルチュ
 ル・ド・ゴビノーの人種哲学(一)——「人種不平等論」を
 中心に——」『同志社法学』(第五二巻第四号、二〇〇〇年
 一月)、一〇九—一六八頁、ジェームズ・M・シーザー「反
 米の系譜学——近代思想の中のアメリカ——」(村田晃嗣な
 ど訳、ミネルヴァ書房、二〇一〇年)の第四章「人種的シン
 ボルとしてのアメリカ——アルチュール・ド・ゴビノーの「新
 しい歴史」——」、九一—一〇九頁によるものが多い。
- (58) 森鷗外「洋学の盛衰を論ず」『鷗外全集』第三四卷、二二—
 二一頁。
- (59) 森鷗外「鼎軒先生」『鷗外全集』第二六卷、四二—四三頁。
- (60) 森鷗外「種族」『衛生新篇・下』『鷗外全集』第三二卷、
 八八—一〇二頁。以下引用は略す。
- (61) 森鷗外「総論」『衛生新篇・上』『鷗外全集』第三二卷、

一一頁。

- (62) Rutledge M. Dennis, *Social Darwinism, scientific racism, and the metaphysics of race*, in *Journal of Negro Education* 64(3)1995, pp243-252.

- (63) 前掲書工藤雅樹 一六〇～一六一頁、前掲書小熊英二、一七六頁。

- (64) 田口の人種論について、武藤秀太郎「田口卯吉の日本人種起源論——その変遷と中国認識——」『日本経済思想史研究』(第三号、二〇〇三年三月)、四七～六四頁は優れる研究を残し、良い参考となる。拙稿「田口卯吉における人種論の展開」『史学研究』(第二九七号、二〇一七年九月)、四七～七二頁は上記の論考を参考にした上で、以下の四点を強調した。一、田口の人種論と文明史論との関係性が薄い。二、南洋行の実体験と「日鮮同祖論」は田口の人種論の形成に決定的な影響を与えた。三、田口の「日本人アリア人種起源説」は黄禍論による外交的圧力のものである。四、田口の人種論は新興帝国日本のセルフ・アイデンティティと関わる。

- (65) 「日鮮同祖論」について、旗田巍「日本における朝鮮史研究の伝統」旗田巍編『シンポジウム 日本と朝鮮』(勁草書房、一九六九年)、四～八頁、三ツ井崇「近代アカデミズム史学のなかの「日鮮同祖論」——韓国併合前後を中心に——」『朝鮮史研究会論文集』(第四二号、二〇〇四年一〇月)、四五～七六頁、沈熙燦「明治期における近代歴史学の成立と「日鮮同祖論」——歴史家の左手を問う——」『立命館史学』(第三五号、二〇一四年)、三一～五九頁を参考。

- (66) 田口卯吉『居留地制度卜内地雑居』『鼎軒田口卯吉全集』第五卷(復刻版、鼎軒田口卯吉全集刊行会編輯吉川弘文館、一九九〇年、以下「田口全集」と略する)、六〇～六一頁。

- (67) 同右。また、前掲書小熊英二、四五頁。

- (68) 田口卯吉「支那は多くの償金を払ひ得べき国格にあらず」『田口全集』第六卷、三四〇頁。

- (69) 徳富蘇峰『大日本膨脹論』(民友社、一八九四年)。

- (70) 田口卯吉「講和の条件」『東京経済雑誌』(第七五一号、一八九四年一月一〇日)。田口親「田口卯吉」(吉川弘文館、二〇〇〇年)、二二三頁。

- (71) 前掲論文武藤秀太郎、五九頁。

- (72) 田口卯吉「日本人種論」『田口全集』第二卷、四七七～四八二頁。

- (73) 前掲書飯倉章(二〇一三年)、四八頁。

- (74) 前掲書ゴルヴィツァー、七～一〇頁。

- (75) 前掲書橋川文三、八～一四頁。

- (76) 同右。また、前掲書ゴルヴィツァー、一二八～一三二頁。

- (77) 田口卯吉「末広重恭君に答ふる」『田口全集』第八卷、二〇八頁。

- (78) 田口卯吉「破黄禍論 一名日本人種の真相」『田口全集』第二卷、四九七～四九八頁。

- (79) 同右、四一六頁。

- (80) 同右、四二二頁。

- (81) 同右、四二二頁。

- (82) 同右、四二三頁。

- (83) 同右、四八五頁。

- (84) 酒井一臣「天孫人種は白人なり——田口卯吉の現実外交路線——」中京大学社会科学研究所運営委員会編『アジア・太平洋地域における「もの」の考え方』(成文堂、二〇〇七年)、一九六頁。

- (85) 田口卯吉「日本人種の研究」『田口全集』第二卷、五〇一

514頁。

- (86) 前掲書橋川文三、五六〜六二頁、先崎彰容『高山樗牛——美とナシヨナリズム——』(論創社、二〇一〇年)、一一九〜一二〇頁を参考。

- (87) 前掲書小熊英二、五九〜六四頁、雨田英一「高山樗牛の国家教育の思想(一、二、三)——教育と国家と宗教——」、『東京女子大学紀要論集』(第五二巻第一、二号、第五三巻第一号、二〇〇一年九月、二〇〇二年三月、二〇〇二年九月)、九七〜一〇七頁、一五五〜一七七頁、一〇七〜一二九頁。

- (88) 井上哲次郎と高山樗牛との関係について、前田愛「井上哲次郎と高山樗牛」、『幻景の明治』『前田愛著作集』第四巻(筑摩書房、一九八九年)、一一三〜一三二頁。

- (89) 国体論の特徴について、昆野伸幸「近代日本の国体論——教育勅語・『国体の本義』・平泉澄——」、『近代』(第一〇六号、二〇一二年三月)、二九〜四六頁、葛西裕仁「平泉澄の国体論における『単民族観』」、『多元文化』(第二〇号、二〇一〇年三月)、二六五〜二七九頁によるものが多い。

- (90) 井上哲次郎『勅語衍義』上巻(井上蘇発行、一九九一年)、一〜二頁。

- (91) 同右、一〇〜一一頁。

- (92) 前掲書小熊英二、五〇〜五五頁。

- (93) 前掲論文雨田英一(一)、(二)、(三)を参考。

- (94) 渡瀬常吉「我国是と宗教信念」、『六合雜誌』(第一九九号、一八九七年七月一日)、二九九〜三〇五頁、前掲書小熊英二、五七〜五八頁。

- (95) 山口輝臣「なぜ国体だったのか」酒井哲哉編『外交思想 日本の外交』第三巻(岩波書店、二〇一三年)、六三頁。

- (96) 高山樗牛「我が国体と新版図」『樗牛全集 改訂註釋』(姉

- 崎正治、笹川種郎編、復刻版、日本図書センター、一九八〇年)第四巻、三六三〜三七三頁。それを論じたものとして、前掲書小熊英二、五九〜六一頁、前掲論文山口輝臣、六〇〜六二頁、林正子「『太陽』文芸欄主筆期の高山樗牛——個人主義的国家主義から絶対主義的個人主義への必然性——」、『日本研究』(第一七号、一九九八年二月)、三二三〜三三四頁などが挙げられる。

- (97) 小熊英二によれば、ここでこそ「親子の情という美名で権力支配を隠蔽する国体論が、新領土には延長できないことを露呈」し、「国民の慈父という天皇の仮面がはぎとられ、むきだしの権力関係があらわれてしまう」という。前掲書小熊英二、六〇〜六一頁。

- (98) 磯前順一「近代日本の植民地主義と国民国家論——津田左右吉の国民史をめぐる言説布置——」、『思想』(二〇九五号、二〇一五年七月)、一〇九頁。

- (99) 前掲書小熊英二、七二頁。

- (100) 高山樗牛「古事記神代巻の神話及歴史」『樗牛全集』第三巻、四二五〜四四三頁。以下引用は略する。

- (101) 高山樗牛の神話研究について、広島一雄「高山樗牛」、『国文学解釈と鑑賞』(第三七巻第一号、一九七二年一月)、一三八〜一四〇頁、平藤喜久子「日本における神話学の発生と高山樗牛——日本主義との関わりを中心に——」、『国学院大学紀要』(第四三号、二〇〇五年)、一四一〜一五六頁によるものが多い。ただし、「日本主義」の影響として捉えてきたと異なり、本稿は高山樗牛の神話研究は人種論という視点から展開させたとする。なぜならば、神話研究の「日本人多人種構成論」と日本主義の「日本人単一人種構成論」とは明らかに矛盾があったからだ。

(102) 高山樗牛の神話研究をめぐる論争について、前掲論文平藤喜久子を参考。

(103) 高山樗牛「植民的国民としての日本人」『樗牛全集』第四卷、四二八〜四三三頁。以下引用は略する。

(104) それについて、朴羊信『陸羯南 政治認識と対外論』(岩波書店、二〇〇八年)、七三〜八二頁を参考

(105) 徳富蘇峰(猪一郎)編述、『公爵松方正義伝』坤巻(公爵松方正義伝記発行所、一九三五年)、五四五頁。前掲書朴羊信、七九頁。

(106) 前掲書朴羊信、七九頁。

(107) 大谷正『日清戦争 近代日本初の対外戦争の実像』(中央公論、二〇一四年)、二二二頁。

(108) 高山樗牛「歴史と人種」『文明史雑論』『樗牛全集』第五卷、三三八頁。

(109) 山室信一「アジア認識の基軸」古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』(緑蔭書房、一九九六年)、三〜四五頁。與那覇潤「近代日本における「人種」観念の変容——坪井正五郎の「人類学」との関わりを中心に——」『民族学研究』(第六八巻第一号、二〇〇三年)、九〇頁による再引用。

(110) 井上琢智「添田寿一と日清・日露戦争——Economic Journal 宛公開書簡等に見る外債募集と黄禍論——」『甲南會計研究』(第九号、二〇一五年三月)、一〜一七頁。

(111) 高山樗牛「人種競争として見たる極東問題」『樗牛全集』第五卷、三四九〜三五〇頁。

(112) 同右、三五二頁。

(113) 高山樗牛「異人種同盟」『樗牛全集』第五卷、四五二頁。

(114) 高山樗牛「大スラヴ主義」『樗牛全集』第五卷、四五二頁。

(115) 高山樗牛「十九世紀総論」『樗牛全集』第五卷、三一五頁。

(116) 福沢諭吉「脱亜論」『時事新報』、一八八五年三月一六日、一頁。

(117) 竹沢泰子「人種概念の包括的理解に向けて」竹内泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』(岩波書店、二〇〇九年)、六〜七頁に詳しい。

(118) 前掲書橋川文三、二二一〜二三八頁、前掲書飯倉章(二〇一三年)、一七七〜二二二頁、前掲書廣部泉、六二〜九二頁を参考。

【付記】

本稿は「人類共同体視域下的儒学与近代詞研究基地」(中央高校基本業務)および「東華大学青年教師科研動基金」の研究成果の一部である。原則として漢文は新体字に改め、ルビは省略した。引用は基本的に原文に忠実とするが、読みやすさを考慮して適宜、句読点を補い表記を改めた場合がある。省略する箇所は(中略)で示す。また、「支那」、「満州」などの呼称などについては、それ自身が問題を含む場合が多いが、本稿では原文を引用する際、あくまでも歴史的名辞としてこれらを捉えて、敢えて訂正を加えなかった。

(東華大学外語学院)